日本語指導が必要な小中学生が600人以上

津市内の公立の小中学校には、日本語指導の必要な子どもが600人以上通っています。その多くは、市内の学校などで先生や友だちと関わりながら、日本語を学び生活しています。

中には、日本語が全く分からず不安や心細さを感じ、学校に通っている子どももいます。そのような子どもや保護者、広くは外国につながる人々を学校以外でも支える場所が津市にはあり、そこに関わる人たちがいます。その一部をご紹介します。

初期日本語教室「きずな」で学ぶ子どもたち

日本での生活に必要な簡単な言葉から身に付ける

朝９時、中央公民館にランドセルを背負った子どもたちが元気に通ってきます。フィリピン、ブラジルなどさまざまな国や地域からやってきた子どもたち。互いの言葉は分かりません。でもみんな笑顔で、生き生きと何か話しています。

ここは、中央公民館にある初期日本語教室「きずな」の一室。６年前から、日本語が全く分からない外国につながる子どもたちに、「はい」「いや」「トイレ」など、日本で生活していくために必要な初期の日本語を学ぶ授業が行われています。

１時間目は「話す・聞く」学習。２時間目は「読む・書く」学習。細かく段階を追って作成されたオリジナルの教材を、一人一人のペースに合わせて学習していきます。毎朝９時から始まる２時間の「きずな」の授業が終わってから、自分の学校へ登校します。

また、中央公民館へ通うことができない子どもたちのために、在籍する学校の一室で、初期の日本語教室を行う「移動きずな」も４年前から行っています。昨年度は「移動きずな」を中学校３校、小学校15校で開設し、「きずな」と合わせると56人が初期の日本語を学びました。

「きずな」を修了したある中学生は、「初めてきずなに来たときはうれしくなかったです。日本語は面白いけど難しいです。でも、きずなの先生たちがぼくの勉強を助けてくれました。時間がかかると思いますが、いつか日本語が上手になって、たくさんの人と話がしたいです。」と語りました。今は学校の先生や周りの友達に支えてもらいながら、他の子どもたちと一緒に将来の夢に向かって学んでいます。

「きずな」「移動きずな」を支える人たち

「きずな」で子どもたちを指導するのは、教室長、副教室長、津市巡回担当員、そして市民ボランティアの皆さん。子ども一人に一人ずつ大人が付き、日本語で日本語を丁寧に、繰り返し教えています。子どもたちにとっては、初めて出会う日本語、初めて触れ合う日本語の先生。ゆっくりした話し方で、誠実に向き合い、励まし、笑顔でほめる。子どもたちは、徐々に日本語が分かるようになり、文字が読めるようになったり、思っていることが話せるようになったりして、表情がどんどん豊かになっていきます。

市民ボランティアの皆さんは「子どもといるととても楽しい」「どう説明すれば分かるか、どうすれば興味を持つかを、考えるのが面白く、やりがいを感じている」「一生懸命接してくれた大人がいたなと思ってくれたらうれしい」「日本のことを好きになってほしい」など、「きずな」の子どもたちへの思いを話してくれました。

市民ボランティアの登録者は年々増えてきています。初期日本語教室「きずな」は、子どもたちの未来を考え、将来幸せな人生を送ることができるようにと願いながら指導してくれる皆さんに支えられています。